

ケルムスコット・ハウスのオスカー・ワイルド

—世紀末・社会主義・ロマンス—

川 端 康 雄

はじめに

本稿は William Morris (1834–96) と Oscar Wilde (1854–1900) の関係について、モリスのロンドンの住まいであったケルムスコット・ハウス (Kelmscott House) を中心的なトポスとして、文化史的な観点から考察する。モリスとワイルドとは 20 歳の年齢の開きがある。ワイルドにとって、モリスは十代から愛読していた詩人であり、長じて唯美主義運動の中心人物となったときには、彼の言う “English Renaissance of Art” (1882 年にワイルドが行った北米講演旅行の際の演題のひとつ) の系譜のなかで重要な位置を占める詩人・装飾デザイナーとして高い評価を与えていた。ワイルドの独特な社会主義論 “The Soul of Man Under Socialism” (1891) にはモリスがその後半生に展開した社会主義の理論と実践の反映が見られる。その一方でモリスは 1880 年代初頭にワイルドと知り合い、その人物に大いに関心を抱いたと見受けられる。晩年に *The Well at the World's End* (1896) をはじめとする散文ロマンスを次々と書いたモリスの文学観あるいは文学趣味は、リアリズム小説の形式を難じてロマンス擁護の論陣を張ったワイルドと深く共振する。両者の思想的関係は、従来考えられているようなモリスからワイルドへの一方的な影響にとどまらず、相互的なものであったのではないか、両者の創作と批評は補完し合うものだったのではないか——こういう仮説を立てて本稿を進めたい。

I. モリスとワイルドの出会い

モリスが家族（妻 Jane と二人の娘）とともにロンドン西郊ハマスミス、アッパー・マル 26 番地の家に転居したのは 1878 年 10 月のことだった。道路を挟んで南側にテムズ河を臨む一戸建て住宅で（図 1）、反対側は長い裏庭となっていた。¹ モリスが愛したコッツウォルド地方のケルムスコット村、そしてそこに借りていた別荘 Kelmscott Manor の名にちなんで Kelmscott House と名付けたこの家はモリスの終の棲家となった。1780 年代に建てられたこの家は現存しており、その一部（地階と馬車小屋）はウィリアム・モリス協会の事務所兼ギャラリーとして一般公開されている。築 200 年以上もたった建物といえば日本ならそれだけで歴史的建造物となるが、地味な外観のジョージ朝建築はいまでもロンドンには数多く残っていて、



図 1 ハマスミス、ケルムスコット・ハウス

アッパー・マルのこの家もとりたてて珍しいものではない。ケルムスコット・マナーがコッツウォルド・ストーンでできた優美な建物であるのと対照的で、モリスがここを拠点として芸術と政治の両面の革新運動を繰り広げた歴史的な建物であるとい

う事実を知らなければ、特に気を留めずに通り過ぎてしまいそうな平凡な造りの家なのである。²

ここは地下鉄ハマスミス駅から徒歩で 10 分程の距離にある。現在のハマスミス駅はピカディリー線とディストリクト線の停車駅であるが、ディストリクト線はモリスがここに転居したときにすでに開通していた。³ モリス商会の仕事や社会主義の活動などでこの地下鉄を使っていたことは、*News from Nowhere* (1890) の冒頭部分の語りにも反映されている。⁴

ケルムスコット・ハウスには後ほどまた立ち返ることにして、アッパー・マルから程近い Ravenscourt Park という地名にも注目しておきたい。

そこに画家の William Blake Richmond (1842–1921) の邸宅 Beaver Lodge があった。近所(徒歩で5分程の距離)のよしみもあり、モリスはリッチモンドと親しく付き合った。この画家によるモリスの肖像画も残っている。そしてこのリッチモンドはワイルドとも親交があった。じっさい、モリスとワイルドとの初めての出会いはリッチモンド邸においてであったと推測される。

ワイルドとモリスの関係についての同時代人の証言は、面白いが信憑性に欠けるというものがある。その最たるものがリッチモンド邸でのエピソードであろう。W・B・リッチモンドの息子の Arthur Richmond の回想録にそれは出てくる。

Moris must have been sensitive to public opinion, at least where his poetry was concerned. One day at a party in our garden my father was talking to Oscar Wilde when Morris came up to them boiling with indignation. He had just published a book of verse. “The press deliberately ignores me,” he angrily exclaimed. “There’s a conspiracy of silence about my book.” Quickly came the retort from Oscar Wilde: “Why not join it, Morris.” (Richmond 22–23.)

じっさいにリッチモンド邸での園遊会に居合わせたであろう人物の回想で、面白いエピソードではあるが、この対話部分に関しては真偽の程は怪しい。Karl Beckson の *Oscar Wilde Encyclopedia* もモリスの項目でまずこのエピソードを引いているが、ワイルドが20歳年長で長年敬愛してきたモリスに発する言葉としてふさわしくないと述べている(220)。Philip Henderson はアーサー・リッチモンドが別のモリス(詩人 Sir Lewis Morris)と混同してしまっている可能性も示唆している(228)。

それでも、リッチモンド邸でモリスとワイルドが初めて会って言葉を交わしたのは確実と思われる。妻 Jane に宛てた手紙でモリスがそのことにふれているからだ。1881年3月下旬のことである。

Did the babes [Morris’s two daughters] tell you how I met Oscar Wilde

at the Richmond's? I must admit that as the devil is painted blacker than he is, so it fares with O. W. Not but what he is an ass: but he certainly is clever too. (Morris, *Collected Letters*, II, 38.)

これはモリスによるワイルドについての微妙な人物評価だと言える。オクスフォード大学モードリン・コレッジを出て1879年にロンドンに移り住んだワイルドは、すぐに社交界で有名になり、*Punch* 誌その他でカリカチュアの種にされた。上記の出会いがあった1881年はワイルドが詩集 (*Poems*) を刊行した年であり、その唯美主義スタイルの誇示を揶揄した Gilbert と Sullivan の喜歌劇 *Patience* の初演があった年である。彼が社交界でどれほど目立つ存在であったかは、William Powell Frith の *A Private View at the Royal Academy, 1881* (1883年) で確認できる。そうした評判 (というか悪評) を聞いていたモリスが、じっさいに会ってみると、軽薄なところも見受けられるにせよ、世評ほどのことはなく、機知に富んでいるという印象を受けたのだった。

その1881年の詩集に入っている “The Garden of Eros” (1881) をはじめ、折あるごとにワイルドはモリスを賛美している。以下はホメロス『オデュッセイア』のモリスによる韻文訳に寄せたワイルドの書評から――

Of all our modern poets Mr. William Morris is the one best qualified by nature and by art to translate for us the marvellous epic of the wanderings of Odysseus. For he is our only true story singer since Chaucer; if he is a Socialist, he is also a Sagaman; and there was a time when he was never wearied of telling us strange legends of gods and men, wonderful tales of chivalry and romance. Master as he is of decorative and descriptive verse, he has all the Greek's joy in the visible aspect of things, all the Greek's sense of delicate and delightful detail, all the Greek's pleasure in beautiful textures, and exquisite materials, and imaginative designs; nor can any one have a keener sympathy with the Homeric admiration for the workers and craftsmen in the various arts, from the strainers of white ivory and the embroiderers in purple and gold, to the weaver sitting by the loom and the dyer dipping in the vat, the chaser of shield and hel-

met, the carver of wood or stone. And to all this is added the true temper of high romance, the power to make the past as real to us as the present, the subtle instinct to discern passion, the swift impulse to portray life. (Wilde, *The Artist as Critic* 73–79.)

オフィシャルなモリス伝の著者である J. W. Mackail (1859–1945) などは、西洋古典学が専門であったため、モリスの英語韻文訳の評価に一定の留保をつけているのだが (Mackail, ii, 180–183)、それに対してワイルドの書評はモリスの訳文を全面肯定して称えている。この書評は *Pall Mall Gazette* 紙の 1887 年 4 月 26 日号に無記名の記事として掲載された。おそらくモリスはこれがワイルドによる書評であることを知り、感謝の念を抱いたことであろう。

さらに、ワイルドの批評エッセイ中でも白眉と言える “Decay of Lying” のなかに以下のくだりが見られる。

Vivian. But Nature is so uncomfortable. Grass is hard and lumpy and damp, and full of dreadful black insects. Why, even Morris’ poorest workmen could make you a more comfortable seat than the whole of Nature can. Nature pales before the furniture of “the street which from Oxford has borrowed its name,” as the poet you love so much once vilely phrased it. (Wilde, *The Artist as Critic* 291.)

ロンドンのオクスフォード通り 449 番地にあったモリス商会のショールームに言及して、ワイルドによるリアリズム批判・ロマンス擁護の文学批評のエッセイにおける論点補強としつつ、モリスへの賛辞としている。これに限らず、ワイルドはほかでもモリスへの賛辞を繰り返している

II. ショーの証言の信憑性

では、モリスのワイルド観はどうだったのであるか。先に引いたリッチモンド邸のエピソードを伝えるモリスの手紙からは、実際に会ってみてワイルドとの対話をかなり楽しんだことがうかがわれた。その点を強調し

たものの、信憑性が疑われているのが、George Bernard Shaw (1856–1950) の証言である。少年時代にダブリンでショーがワイルドと初めて会ったときのことを回想したくんだり (ワイルドの伝記作者 Frank Harris に宛てた手紙) にこうある。

Wilde and I got on extraordinarily well on this occasion. I had not to talk myself, but to listen to a man telling me stories better than I could have told them. [...] And he had an audience on whom not one of his subtlest effects was lost. And so for once our meeting was a success; and I understood why Morris, when he was dying slowly, enjoyed a visit from Wilde more than from anybody else, as I understand why you [Frank Harris] say in your book that you would rather have Wilde back than any friend you have ever talked to, even though he was incapable of friendship, though not of the most touching kindness on occasion. (Shaw 13; 下線は引用者)

下線部分のエピソードをショーは Hesketh Pearson にも語っていて、「あんなに面白い話し相手は初めてだ」とモリスが言ったとする言葉を付け足している。ショーはこれを直接モリスから聞いたのではなく、娘のメイ・モリスからの又聞きだとピアースンに説明している (Henderson 340)。

ショーの証言が疑われる一番の理由は、下線部分の “when he was dying slowly” という記述のためである。モリスが目に見えて「死に向かっていた」と言えるほど体調が悪化したのは 1896 年に入ってからであり (モリスは 1896 年 10 月 3 日にケルムスコット・ハウスで死去)、ワイルドは 95 年の 5 月から 2 年間獄中にいたわけなので、これではつじつまが合わないというわけである。だがショーは「レディング監獄など想像もできなかった以前にモリスの体調は悪化していた」のだとピアースンに説明している (qtd. in Henderson 150)。確かに 1991 年春、ケルムスコット・プレスの最初の刊本を出したあたりからモリスは病気がちになっていて、体力の衰えは目に見えていた。じっさい、E. P. Thompson は、1891 年春の体調悪化

について“His illness was more grave than has generally been realized, and it may have represented the first onset of the diabetic condition from which he died” (581) と指摘している。そうだとすれば、1891年春以降、95年春の「ワイルド裁判」までの4年間を指して、モリスがワイルドの訪問を他の誰よりも楽しみにしていたというショーの証言は成立することになる。⁵

モリスのほうからワイルドに本の献呈もしている。敬愛する物語作者＝デザイナーからのプレゼントに感激したのであろう。その礼状(1891年の3月もしくは4月の手紙)でもモリスへの賛辞が、大げさすぎるくらいに書かれている。

Dear Mr Morris, The book has arrived! And I must write you a line to tell you how gratified I am at your sending it. How proud indeed so beautiful a gift makes me. I weep over the cover which is not nearly lovely enough, not nearly rich enough in material, for such prose as you write. But the book itself, if it is to have suitable raiment, would need damask sewn with pearls and starred with gold. I have always felt that your work comes from the sheer delight of making beautiful things: that no alien motive ever interests you: that in its singleness of aim, as well as in its perfection of result, it is pure art, everything that you do. But I know you hate the blowing of trumpets. I have loved your work since boyhood: I shall always love it. That, with my thanks, is all I have to say. (Letter of Wilde to Morris, [? March-April 1891] Wilde, *Complete Letters* 476.)

賛辞のなかに、本の装丁が内容に見合っていないお粗末なものであるという批評を加え、その注文をさらにモリスへの賛辞にしている修辭が巧みである。ここで言及されているモリスの献呈本は、Hart-Davies 編のワイルド書簡集をはじめ、従来は *News from Nowhere* の普及版であると見なされていたが (Wilde, *Collected Letters* 291)、実はそうではなく、モリスが1889年に出した散文ロマンス *The Roots of the Mountains* の Reaves and Turner 社版であることが最近確認された。⁶ その版であれば、確かに内容に見合う美

しいカバーでないというワイルドの苦情が納得できる。ただしその本文は Chiswick Press の Basle Roman 体を使っていて、モリスはそれを同時代の印刷業界のなかで数少ない許容できる活字体としてそれなりに評価していたのではあったが。⁷

III. ケルムスコット・ハウスの馬車小屋

さて、モリス伝の著者ヘンダースンは、さきほどのショーの回想を引いた上で、「これ以外にはワイルドがハマスミス [のモリス宅] を訪れたという言及はどこにも見られない」と述べている (Henderson 349)。しかし私の知る限り、ひとつ有力な証言がある。それに入る前にケルムスコット・ハウスの「集会場」の説明をしておかなければならない。

ケルムスコット・ハウスには家の正面から見て左手に小さな付属の建物がある。もともとは馬車小屋 (Coach House) すなわち自家用の馬車を置くスペースとして作られていたものである。モリスはこの家を借りるに当たって、家族には馬車を購入することを口にしていたようだが、結局ここで自家用馬車を持つことはなく、別の用途に用いた。すなわち、入居早々は絨毯織機を設置して一種の工房として、モリス自身が長時間かけて絨毯織の練習に打ち込んだ。そして 1880 年代に次第に社会主義運動に精力を傾けていくと、ここに座席を備え付けて講堂に改装し、定期的に講演会を行っ



図2 ケルムスコット・ハウスの講堂 (馬車小屋を改装) (1890年代の写真)

た (図2)。特に The Socialist League がアナキスト過激派の勢力が多数派を占めるようになったためにこの組織と袂を分かち、The Hammersmith Socialist Society を結成した 1890 年 11 月以降は、この自宅講堂がモリスの政治活動の実質上の本拠地となったのである。

前述のバーナード・ショー、H. M. Hyndman (1842–1921), Keir Hardie (1856–1915), Sidney Webb (1859–1947), Kropotkin (1842–1921), Stepnyak (Sergei Mikhailovich Kravchinskii; 1851–1895) らがここで講演を行っているが、誰よりも多く演壇に立ったのはモリス自身に他ならない。ハマスミス社会主義協会以後の1891年から93年3月までに限っても、モリスはここで8回講師を務めている (Thompson 586)。聴衆のなかには若き W. B. Yeats (1865–1939) や H. G. Wells (1866–1946) もいた。1回で50人程度は集まったとされる。そしてそのなかに (少なくとも一度は) ワイルドも含まれていたことが、カナダの女性作家 Georgina Sime (1868–1958) の回想によって確認できる。

サイムはスコットランド生まれ、両親とも作家で、1879年、11歳で家族とともにロンドン、ハマスミスのモリス宅のあるアッパー・マルに程近いチジックに移り住んだ。1907年にカナダのモントリオールに移住。1919年に刊行した短編小説集 *Sister Woman* は都会の貧困層の女性を描き、カナダにおけるフェミニズム文学の先駆的な作品として評価されている (Campbell)。晩年、1950年頃英国に戻った際に、自身の少女時代、つまり1880年代から90年代にかけて出会ったモリス、イェイツ、George Meredith (1828–1909), Henry James (1843–1916) といった文人についての回想録 *Brave Spirits* を1952年に私家版で出している (Frank Nicholson との共著となっている)。そのなかのモリスを回想した章 “A Whiff of William Morris as a Socialist” のなかにケルムスコット・ハウスでワイルドを見たという証言が出てくる。

Oscar Wilde was there [the lecture room of Kelmscott House] too on that evening, and if a discussion had arisen as to whether a complete unlikeness can exist between two human beings of the same race, Shaw and Wilde might have been taken as illustrations of such a possibility Shaw, standing there in the crowd and making one of them, yet looked as if he were alone, surrounded by nothing but space. He seemed a bit of pure

Calvinism, a chapter of the “Institutes” come to life and ready to deliver its message to us. Oscar Wilde was equally distinctive in his own way, but that way was so inherently different from Shaw’s that the epithet “human” seemed hardly applicable to both. The comparison I am about to make is, I know, an absurd one, but what Oscar Wilde reminded me of on that night was a basket of fruit, ripe and enticing, bulging over the basket-edge and dropping some of its juices on to the floor. He was wearing in his buttonhole, if I may trust the picture that my mind’s eye gives me, a very large dahlia, crimson and beautiful in its amplitude but not what one would expect to find on a man’s coat. Shaw simply couldn’t have worn it; if he had put it in *his* buttonhole it would have died a natural death in self-defence. There was another writer in our company that evening, the Russian refugee Stepniak, as he called himself, a small dark man who, like so many of those present, was bent on regenerating the world . . . (Sime and Nicholson 14; 下線は引用者)

サイムの回想によれば、ワイルドに加えて、ケルムスコット・ハウスのコーチ・ハウスでのこのモリスの講演会には Walter Crane (1845–1915) や亡命ロシア人のステプニャークが混じっていた。バーナード・ショーも出席していて、サイムの上記の回想ではショーとワイルドとの対比がユニークだが、それにもまして、ワイルドを熟し切った「フルーツの籠」に喩える描写、そして上着のボタンホールに深紅色のダリアをつけて姿が印象的である。このときのモリスの演題が何だったか、またその日時もサイムは記録していない。モリスが定期的に講演会を行っていた期間と居合わせた顔ぶれ、そしてサイムがモリス宅を訪れていたと思われる時期などから推測して、このエピソードは 1890 年代初頭のことであったかと思われる。

IV. 拠点としてのケルムスコット・ハウス

前節で見たように、1880 年代から 90 年代にかけて、ケルムスコット・ハウスは、その一部を集会場に変えたことにより、イギリス社会主義運動の重要な活動拠点となっていた。モリスは 1891 年に社会主義同盟ハマス

ミス支部を独立させてハマスミス社会主義同盟として再組織化し、ショーやハインドマンらに働きかけて、セクト争いを超克して大同団結を図る中心的人物となっていた。ケルムスコット・ハウスは、そうした議論をする場として使われた。

さらにまた、この家でモリスは絨毯織やタペストリー織に打ち込み、またモリスの活字の冒険であるケルムスコット・プレスは、ここで企画を練り、このアッパー・マルの地で実行に移していった。1888年にThe Arts and Crafts Exhibition Societyが主催した第一回アーツ・アンド・クラフツ展におけるEmery Walker (1851-1933)の講演“Letterpress Printing and Illustration”についてワイルドは『ベル・メル・ガゼット』1888年11月16日に無署名の記事を出している。この講演は「近代印刷史の転換点を示すもの」(ピータースン411)としてたいへん重要なものだったと評価される。というのは、この講演こそがモリスにケルムスコット・プレス創設に向けて背中を押したからである。アーツ・アンド・クラフツ運動史上もきわめて重要とされるその現場にもワイルドは居合わせていたことになる。

ケルムスコット・プレスとの関連で附言すると、その19冊目の刊本はWilhelm Meinhold (1797-1851)の*Sidonia the Sorceress*であった。これはワイルドの母親が英訳を手がけて1849年に刊行したもので、若きモリスとその仲間たちが愛好した作品だった。バーン＝ジョーンズにはこれを題材とした初期の作品がある。ケルムスコット・プレス版での復刻の許可を取るのにモリスはワイルドに仲介を頼んでいる。そうした事務的な用件であるためか、文面はかなりフォーマルなものではある。⁸

ケルムスコット・ハウスのあるハマスミス、アッパー・マルの周辺にアーティスト、デザイナー、アーツ・アンド・クラフツ運動の関係者が集まってきたのは、モリスのもつ磁力であったといえる。そういうわけで、ケルムスコット・ハウスは政治と芸術双方の革新運動(モリスにしてみれば総合的な運動)の一大拠点となっていたということが言える。そしてその運動にワイルドも一枚加わっていたと見ることができる。

日本における昭和後期のモリス研究の第一人者である小野二郎は、中野好夫によるワイルドの過小評価に反論して“*The Soul of Man Under Socialism*”を擁護する論陣を張った。小野は次のように書いている。

このエッセイ（“*The Soul of Man Under Socialism*”）をワイルドが発表したのは、一八九一年、ワイルド得意の時代であった。一八八〇年代から始まったイギリス社会主義復興は、九〇年代に入ってますます強まっていたから、知識人一般はこのワイルドの「社会主義宣言」にさしたる驚きを示したわけではなかったが、社交界でブリリアント・トーカールとしてのワイルドを享受していた貴婦人連にとっては当然スキャンダルであった。むろんワイルドはこれを狙っていたわけだが、この狙いの重層性、かなりの厚味のある重層性に気づく必要がある。

いわゆる審美主義運動の隣りには、アーツ・アンド・クラフツ・ムーヴメントがあった。様々な社会主義運動があった。そのすべてが交錯するところにウィリアム・モリスという大きな存在がいた。人が思う以上に、ワイルドはモリスの徒である。モリスの一部をラジカルに押しつめ、個人プレイにしてしまったところがあるが、しかし異端の芸術家の奇矯で幼稚な思想などではない。ウォルター・クレインといったようなイラストレーター、シドニ・コッカレルのような印刷者、ノーマン・ショウのような建築家と同時代人であるのみならず、それらの芸術思想の中心部分の微妙な表現者であった。クロボトキンの影響？ クロボトキンにワイルドが会ったのは、モリスの紹介でであった。クロボトキンのアナキズムと芸術至上主義の野合などという話は、モリスとクロボトキンの思想的関係をじっくり見てからでも遅くはあまるまい。しかし、ワイルドの「批評家としての芸術家」*The Artist as Critic*などや「獄中記」として知られる *De Profundis* などが「社会主義下の人間の魂」解説に直接関係するし、ワイルドの作品そのものにも、もっとついて読んで見たいと思う。そしてまた、ワイルド自身の上記芸術運動総体への批評——これこそワイルド批評文学の精髓だが——も読まねばならぬ。（小野 30）

小野のこのエッセイは、唯美主義運動、アーツ・アンド・クラフツ運動、またそれらと次元が異なると見なされがちな社会主義運動、それらのすべ

てが交錯する地点にモリスがいたこと、そしてワイルドがその流れに沿って芸術家＝批評家としての活動を行ったことを論証した貴重な論考である。そのことを確認したうえで、私はさらに、ワイルドの批評がモリスの創作活動に弾みを与えたという面もあったのではないかということを描きつけておきたい。

1880年代後半からモリスはいわゆる散文ロマンス作品を死の床に至るまで続々と書き綴っていった。先ほど少しふれたワイルドの批評“Decay of Lying”でのリアリズム文学批判——lying すなわち虚構化能力を喪失した文学形式に否を唱え、その力の回復を図る、つまりはロマンスの復権の主張——はモリスには十分すぎるほど理解できたはずで、ワイルドが批評で展開したポイントを、モリスはロマンス創作において実践していたと言える。文学批評＝創作においてもモリスとワイルドは歩調を合わせている。そのように見ると、バーナード・ショーの前述の回想は概して疑わしいとされてきたものの、モリスがその晩年に「ほかの誰よりもワイルドの訪問を楽しんだ」という言葉に、いくばくかの真実が含まれていると見ることが確かにできるのである。

注

本稿は日本ワイルド協会第36回大会（2011年12月10日、於東京女子大学）でのシンポジウム「ワイルドと世紀末ロンドンの諸相」の口頭発表に加筆修正を施したものである。

1 その後裏庭は新たな道路で寸断されて、現在の庭は面積が半分以下になっている。モリスとハマスミスについては *Levitas* を参照。

2 さらに言えば、モリスが転居する前にここは作家の George MacDonald (1824–1905) の一家が“Retreat”と名付けて住んでいた。Narnia の作者 C. S. Lewis に大きな影響を与えた二人の「ファンタジー」作家の住まいであったという点でもこの家は特筆に値する。

3 ロンドンの地下鉄は1863年にまず Paddington-Faringdon 間の Metropolitan Line 線が開通。次いで District Line が 1868 年に Westminster-South Kensington 間で開通、1874 年にハマスミスまで伸びた。District Line は地表のすぐ下を走り、蒸気機関を使ったが、換気の点で非常に問題があった。モリスが *News from Nowhere* を書いていた 1890 年には、世界初の地下鉄電車 (City and South London Line、現在の

Northern Line) が開通している。

4 Morris, *News from Nowhere* 1. 該当部分を拙訳で引いておく。「[主人公のウィリアム・ゲストは] 西の郊外へと一人家路についた。交通手段は文明がわれわれに押し付けて習慣のようにしてしまった例のもの。気ぜわしく満ち足りぬ人類の蒸し風呂、すなわち地下鉄である。その車両のなかに座りながら、やっこさんは、ほかの乗客と同様に、満ち足りぬ思いをしながらうだっていた」(モリス『ユートピアだより』11-12頁)。

5 Alfred Douglas (1870-1945) は、彼の知る限り、1892年以降ワイルドはモリスとまったく付き合いがなかったという趣旨のことを言っているが(76)、これも部分的な証言でしかないと思われる。

6 Cf. Faulkner 33; Wilde, *Complete Letters* 476. *The Roots of the Mountains* の献呈本およびモリスの同時期の歴史的ロマンス *A Tale of the House of the Wolfings and All the Kindreds of the Mark* (1888) をワイルドが愛読した次第については Wright 132-133 を参照。後者のロマンスについてワイルドは書評を書いていて、これも称賛している(Wilde, “Mr William Morris’s Last Book”)

7 じつは *The Roots of the Mountains* はウオトマン紙を用いた250部限定の特装版も同時期に出されている。しかしこの豪華版をモリスはワイルドに送らなかつたようだ。

8 Dear Mr. Wilde / I am told that Lady Wilde, your mother, was the translator of a book which was much read and liked by our clique some twenty five or thirty years ago. I think it still a very good translation of a very good book, and it is now long out of print. Now I want to print a small edition (say 350) at the Kelmscott Press; but I should by no means like to do so without express permission from Lady Wilde. Would you be so kind as to lay my wants before her, and also to ask her what she would think a proper honorarium for this privilege. / One thing I should add, that I propose printing the book just as it stands, errors of the press excepted; as I hate alternations years after the date of the first issue. / I am / Yours very truly / William Morris / P.S. Just like me! I have not mentioned the name of the book: but no doubt you have guessed that I am writing of Sidonia the Sorceress. (Morris to Wilde, January 5, 1893. Morris, *Collected Letters*, IV, 4-5.)

引用文献

Beckson, Karl. *Oscar Wilde Encyclopedia*. With a Foreword by Merlin Holland. New York: AMS P, 1998.

Campbell, Sandra. “Introduction: Biocritical Context for J. G. Sime and *Sister Woman*.” J. G. Sime. *Sister Woman*. Ed. Sandra Campbell. Ottawa: Tecumseh P, 2004. 207-226.

Douglas, Lord Alfred. *Oscar Wilde and Myself*. London: John Long, 1914.

Faulkner, Peter. “William Morris and Oscar Wilde.” *Journal of William Morris Studies*

- 14.4 (Summer 2002): 14–24.
- Henderson, Philip. *William Morris: His Life, Work and Friends*. London: Thames and Hudson, 1977. [フィリップ・ヘンダーソン『ウィリアム・モリス伝』川端康雄他訳、晶文社、1991年]
- Levitas, Ruth. *Morris, Hammersmith and Utopia*. London: The William Morris Society, 2005.
- Mackail, J. W. *The Life of William Morris*. 2 vols. London, 1899.
- Morris, William. *The Collected Letters of William Morris*. Ed. Norman Kelvin, 4 vols. Princeton: Princeton UP, 1984–96.
- . *News from Nowhere*. 1891. Ed. David Leopold. Oxford: Oxford UP, 2003. [ウィリアム・モリス『ユートピアだより』川端康雄訳、晶文社、2003年。]
- Peterson, William S. *The Kelmscott Press: A History of William Morris's Typographical Adventure*. Oxford: Oxford UP, 1991. [ウィリアム・S・ピーターソン『ケルムスコット・プレス——ウィリアム・モリスの印刷工房』湊典子、平凡社、1994年。]
- Richmond, Sir Arthur. *Twenty-Six Years 1879–1905*. London: Geoffrey Bles, 1961.
- Shaw, Bernard. “My Memories of Oscar Wilde.” Frank Harris. *Oscar Wilde: His Life and Confessions*. 1918. Two Volumes in One. New York: Horizon P, 1974. 1–32.
- Sime, Georgina, and Frank Nicholson. *Brave Spirits*. London: Priv. Print. [1952].
- Thompson, E. P. *William Morris: Romantic to Revolutionary*. 1955. London: Pantheon, 1976.
- Wilde Oscar. *The Artist as Critic: Critical Writings of Oscar Wilde*. Ed. Richard Ellmann. Chicago: U of Chicago P, 1982.
- . *The Complete Letters of Oscar Wilde*. Ed. Merlin Holland and Rupert Hart-Davis. London: Fourth Estate, 2000.
- . *The Letters of Oscar Wilde*. Ed. Rupert Hart-Davis. New York: Harcourt, Brace, 1962.
- . “Mr William Morris’s Last Book.” *Pall Mall Gazette* 2 March 1889.
- Wright, Thomas. *Oscar’s Books: A Journey around the Library of Oscar Wilde*. London: Vintage, 2009.
- 小野二郎「白熱せる魂と犯罪への共感——ワイルドと社会主義下の人間の魂」『自由時間』創刊号、1975年11月、土曜美術社、23–30頁。